

## 閉ざされた隠逸空間

——庾信「小園賦」論——

### 二 宮 美 那 子

滋賀大學

はじめに 隠逸空間の變遷

古來、隠逸者たちは世を避けて様々な場所に赴いた。伯夷・叔齊の首陽山は逃避の果ての終着点であるし、范蠡の江湖は際限ない自由の代名詞ともなった。疏廣疏受の二疏は功成り名遂げて郷里に身を退け後世に稱えられた。陶淵明の田園詩、謝靈運の山水詩は、世俗に背を向けた場ではぐくまれた文學といえる。唐代になると、詩人たちは様々な形で「官」と距離を置いた文學の場を築いた。王維の輞川莊、杜甫の浣花草堂、白居易の廬山草堂や履道里邸は、唐代を代表する例である。

韋應物が「郡齋」を隠逸の場として提示し、「吏隱」の言葉が広く用いられていたことから分かるように<sup>①</sup>、中唐では「官」と地続きの場に隠逸空間を見出そうとする動きが活発になる。官僚制度の確立や文學の擔い手の變化と共に、隠逸空間にも廣がりと變化が現れる。「中隱」を詠った白居易文學は、朝廷や繁華な市中での隠逸である「朝隱」「市隱」の流れをくみ、「どのような場所でも自足する」生き方を標榜したものである。五湖に遊ぶような無制限の自由は手に入るべくもないが、自らの置かれた状況下で「自由」を求め、その中で自足した生活を送る。見方を變えると、白居易の「中隱」は、仕官を人生の前提とする士大夫階層が、人生のバランスをとるために必然的に生み出した「隠逸」の一形態とも見ることができ。筆者は以前、白居易の隠逸空間、特に人生の最後に手に入れた洛陽履道里邸が、「外部から閉ざされた」性質を持つことを指摘した<sup>②</sup>。晩年に築いた理想の住處、履道里邸を描く「池上篇」において、白居易は恐らく意識的に外の世界を遮断し、理想の地に自足する喜びを詠った。白居易の

隠逸空間について論じる中で、筆者は庾信「小園賦」についてこのように指摘した。

何らかの危機に直面した時、あるいは周囲の状況と自身の生き方がちぐはぐになった時に、自らの據り所としての閉鎖的な「小空間」を求め、外界との接觸を断つというのは、處世の一つのありかたとして理解できる。これを文學作品のテーマとして展開した恐らく初めての例は、庾信の「小園賦」であろう。<sup>③</sup>

自らの意思で履道里邸を築きあげ自足した晩年の白居易と、北遷後のままならぬ状況下で窮餘の避難場所を求めた庾信とは、動機と経緯とももちろん大きな違いがあるし、それぞれの空間の性質も大きく異なっている。<sup>④</sup>一方で、新天地を求めて別世界に移動するのではなく、今ある場所を外から遮断することで隠逸空間を築き上げる点において、兩者には共通点を見出すこともできる。本論は、文學において隠逸空間がいかに構築されるのかという観点から、庾信

「小園賦」に着目し、庾信以前の隠逸文學の流れにも目を配りながら、その特色を探るものである。

## 一 小園賦概観

小園賦は、庾信が北朝に移って間もない時期の作品とされる。<sup>⑤</sup>庾信には代表作「哀江南賦」を始めとして十五篇の賦が残り、うち北朝に移ってからの作品は八篇（三月三日華林園馬射賦」「竹杖賦」「邛竹杖賦」「枯樹賦」「傷心賦」「象戯賦」「哀江南賦」「小園賦」）残される。安藤信廣氏は庾信の賦について、南朝に比べ北朝での作品は長編化する傾向があること、南朝の賦が全て詠物の作品であるのに對し、北朝では詠物の賦がほとんどないこと、などを指摘する。<sup>⑥</sup>また興膳宏氏は、南朝期の庾信の賦に七言句（2・2・3）が好んで用いられるのに對して、北遷後の庾信の作品には七言句がほとんど表れないことを指摘し、「重い憂愁に閉ざされた庾信關外の文學には、七言句の輕快なリズムは、もはや違和感をもたらすものとしてしか作用しなかつたのであろうか」と述べる。<sup>⑦</sup>これらの指摘から、北遷以降の庾

信の賦には、内容と形式において深刻な變化が現れていることがうかがえる。更に付け加えると、北朝での賦の多くは、北朝に到るまでの波瀾と悲痛、出仕への葛藤をめぐって描かれている。庾信の代表作「哀江南賦」を始めとして、移植された枯樹の奇怪な姿に自らを投影した「枯樹賦」、仕官への葛藤を假構した人物の問答を借りて詠う「竹枝賦」「邛竹杖賦」、愛兒を失った嘆きを詠う「傷心賦」、そしてこれから取り上げる「小園賦」もこれに連なる。

さて、作品の主題「小園」とはいかなるイメージを持つ言葉だろうか。「園」は圍われた果樹園・耕作地・庭園などを指す。古くは『周易』賁に「賁于丘園、束帛芟芟（丘園を賁る、束帛芟芟たり）」と見え、『文選』にはこの『周易』の言葉をふまえ、高潔の士が隠れる場所として「丘園」を用いる例が複数見られる。<sup>⑧</sup> また「舊園」「故園」「園林」などの語は、公（おおやけ）を離れた私的な生活の場、遊興の場として用いられる。庾信にも制作時期・場所が不明ながら北遷後の作品とおぼしき「園庭詩」「寒園即目」があり、隱逸者としての暮らしを描寫している。また

「園」は限定された・圍われた場所というイメージをもつ。とられるもののない無限の自由を象徴する「江湖」ではなく、また家産を伴い、周囲の自然をも巻き込む廣大な生活の場として描かれる「居」でもない。「園」という語がもつ、人工的に區切つて作られた場所というイメージは、「小園賦」の構想に重要な意味をもったと考えられる。

「小さな」「ささやかな」を意味する「小」は、狭小な場所に逃避したいという願望を示す。「二枝」<sup>⑨</sup>「一丘一壑」<sup>⑩</sup>といった言葉があるように、あるいは陶淵明が「歸去來兮辭」で「南窗に倚りて以て傲を寄せ、容膝の安んじ易きを審る」と詠ったように、限定された小空間に理想を託し自足するのは、伝統的な隱逸思想の一つといえる。とるにたりないような小空間だが、その中には侵されざる楽しみと自由が存在することを主張するのだ。「小園賦」の中にも、以下に見ていく序文の冒頭に「一枝」「一壺（壺公）」などの語が見られ、小空間への指向を示している。「小園」にはこのように「狭小な・ささやかな・隔離された場所」に救いと解放を求める氣持ちが込められているといえよう。

庚信以前の文學作品に「小園」が使用された例は少ない。史書では、『梁書』卷二十五・徐勉傳に見られる南朝・梁の徐勉が息子崧を戒める手紙（『藝文類聚』卷二十三・鑑誡にも收められる）に、徐勉が建康近郊の東田に築いた「小園」のことが記される。手紙の冒頭で徐勉は、「小園」を營む目的を「播藝して以て利の入るを要むるに在るに非ず、正に池を穿ち樹を種え、少しく情賞を寄せんと欲す。又た郊際の閑曠なるを以て、終に宅と爲すべく、儻し懸車して事を致すを獲れば、實に斯に歌哭せんと欲す」と述べる。この「小園」は徐勉の二十年の丹精によって庭園美を備え、また「人外と云うと雖も城闕は密邇」、郊外と言つても都市から近い場所にあつたといふ<sup>⑪</sup>。都市につかず離れずの距離に建てられており、田畑と庭園とを備えていた點で、庚信の「小園」と共通する。

「小園賦」が収録される『藝文類聚』に注目すると、同賦が收められる卷六十五・產業部上・園は、漢・枚乘「梁王兔園賦」、齊・謝朓「遊後園賦」、梁・裴子野「遊華林園賦」、梁・江淹「梁王兔園賦」を採録し、「小園賦」はこれ

らの後に並べられる。「小園賦」以前の作品は、その題名からも明らかのように、いずれも貴人の庭園に遊ぶ情景を描いたものであり、「小園賦」とは系統を異にする。小園賦は、「園」という題材を、社交的で華やかな場から孤獨な隱逸の場へと轉換させた作品と捉えることもできるだろう。

さて、まずは「小園賦」の全體を概観しておこう。<sup>⑫</sup>

#### 序文

若夫一枝之上、巢父得安巢之所、一壺之中、壺公有容身之地。況乎管寧藜牀、雖穿而可坐、嵇康鍛竈、既煖而堪眠。豈必連闌洞房、南陽樊重之第、綠墀青瑣、西漢王根之宅。

余有數畝弊廬、寂寞人外。聊以擬伏臘、聊以避風霜。雖復晏嬰近市、不求朝夕之利、潘岳面城、且適閑居之樂。況乃黃鶴戒露、非有意於輪軒、爰居避風、本無情於鐘鼓。陸機則兄弟同居、韓康則舅甥不別。蝸角蚊睫、又足相容者也。若し夫れ一枝の上、巢父巢を安んずるの所を得、一壺の中、壺公身を容るるの地有り。況んや管寧の藜牀は、穿つ

と雖も坐すべく、嵇康の鍛竈は、既にして煨かくして眠るに堪う。豈に必ずしも園を連ね房を洞するは、南陽樊重の第、綠墀青瑣なるは、西漢王根の宅ならんや。

余 數畝の弊廬有り、人外に寂寞たり。聊か以て伏臘に擬し、聊か以て風霜を避く。復た晏嬰は市に近きと雖も、朝夕の利を求めず、潘岳は城に面すと雖も、且つ閑居の樂しみに適う。沉んや乃ち黃鶴露を戒むるも、輪軒に意有るに非ず、爰居風を避くるも、本より鐘鼓に情無し。陸機は則ち兄弟共に居り、韓康は則ち舅甥別れず。蝸角蚊睫も、又た相い容るるに足る者なり。

序文ではまず、狭小な空間に起座した例として巢父・壺公や管寧・嵇康を列擧し、小空間の中で安寧を得たいという願いが示される。これらの空間は、豪奢な生活（樊重の第・王根の宅）・意に沿わぬ榮達（黃鶴輪軒・爰居鐘鼓）と對置される。

「小園」の在處は晏嬰・潘岳の故事をふまえて示唆される。「人外に寂寞たる」粗末な住まいとする一方で、晏

嬰・潘岳の居宅になぞらえることから、少なくとも「市」や「城」の周邊——人里から遠く離れた山中ではなく——に設けられたと讀み取れる。ここでいう「人外」は人跡の減した地の果てではなく、都市の外、郊外というほどの意味でとるのが良いと考えられる。北遷後すぐの時期に書かれたとされる「小園賦」だが、序文の中には既に、野に退くことも仕官を拒絶することもままならない「小園」の微妙なあり方が示されている。末尾の陸機と韓康は、異土にあつても共にある家族をいうか。後に本文にも家族の描寫が見える。

以下本文を三段に分けて示す。換韻の箇所は／で示し、行論の便宜上全體に通し番號を付した。

①爾乃窟室徘徊、聊同鑿坏。桐間露落、柳下風來。琴號珠柱、書名玉杯。有棠梨而無館、足酸棗而非臺。／②猶得歇側八九丈、縱橫數十步、榆柳三兩行、梨桃百餘樹。撥蒙密兮見窗、行歇斜兮得路。蟬有翳兮不驚、雉無羅兮何懼。

／③草樹混淆、枝格相交。山爲簞覆、地有堂坳。藏狸竝窟、

乳鶴重巢。連珠細菌、長柄寒匏。／④可以療饑、可以棲遲。  
飯隴兮狹室、穿漏兮茅茨。簷直倚而妨帽、戸平行而礙眉。  
坐帳無鶴、支牀有龜。鳥多閑暇、花隨四時。心則歷陵枯木、  
髮則睢陽亂絲。非夏日而可畏、異秋天而可悲。／⑤一寸二  
寸之魚、三竿兩竿之竹。雲氣陰於叢著、金精養於秋菊。棗  
酸梨酢、桃榘李奠。落葉半床、狂花滿屋。名爲野人之家、  
是謂愚公之谷。／⑥試偃息於茂林、迺久羨於抽簪。雖有門  
而長閉、實無水而恆沉。三春負鋤相識、五月披裘見尋。問  
葛洪之藥性、訪京房之卜林。草無忘憂之意、花無長樂之心。  
鳥何事而逐酒、魚何情而聽琴。(①爾して乃ち窟室に徘徊し、  
聊か坯を鑿つに同じ。桐間に露落ち、柳下に風來たる。琴は珠柱  
と號し、書は玉杯と名づく。棠梨有るも館無く、酸棗足るも臺  
に非ず。／②猶お欵側は八九丈、縱横は數十歩、榆柳は三兩行、  
梨桃は百餘樹を得。蒙密を撥きて窗を見、欵斜を行きて路を得。  
蟬は翳有るも驚かず、雉は羅無ければ何ぞ懼れん。／③草樹は混  
淆し、枝格は相い交わる。山は簣覆を爲し、地に堂坳有り。藏狸  
窟を竝べ、乳鶴は巢を重ぬ。連珠の細菌、長柄の寒匏。／④以て  
饑えを療すべく、以て棲遲すべし。飯隴たる狹室、漏を穿つ茅茨。

閉ざされた隱逸空間 (二宮)

簷は直倚にして帽を妨げ、戸は平行にして眉を礙ぐ。帳に坐す  
るに鶴無く、牀を支えるに龜有り。鳥は閑暇多く、花は四時に隨  
う。心は則ち歷陵の枯木、髮は則ち睢陽の亂絲。夏日に非ざるも  
畏るるべく、秋天に異なるも悲しむべし。／⑤一寸二寸の魚、三  
竿兩竿の竹。雲氣 叢著に陰り、金精 秋菊を養う。棗は酸にし  
て梨は酢、桃は榘、李は奠あり。落葉床に半ばし、狂花屋に滿  
つ。名づけて野人の家と爲し、是れを愚公の谷と謂う。／⑥試み  
に茂林に偃息し、迺ち久しく簪を抽くを羨む。門有りと雖も長く  
閉ざし、實に水無くして恆に沉む。三春 鋤を負いて相い識り、  
五月 裘を披りて尋ねらる。葛洪の藥性を問ひ、京房の卜林を訪  
なう。草は憂いを忘るるの意無く、花は長く樂しむの心無し。鳥  
何事ぞ酒を逐わん、魚何の情ありてか琴を聽かん。

第一段は小園内部の描寫から始まる。「穴藏にうろうろ  
する」自己を描き、仕官を拒んで逃げた隱者の故事を用い  
<sup>15)</sup> 隱者のすまいを示す琴や書、様々な植物や動物、また  
ごく小さな山や池が描寫される。植物名が列擧され、木や  
竹がその數でもって示されるのは、潘岳「閑居賦」の流れ

をくむ。また清・吳兆宜の注には陶淵明「歸園田居五首」  
 其一の「榆柳蔭後簷、桃李羅堂前」を引く。小園は潘岳の  
 閑居と比べるとけして豊かとは言えないが、それでも飢え  
 を癒やし、日々を送ることができ(④)。また②で描か  
 れる蟬や雉は、脅かす者がいない地でのびのびと過ぐす。  
 旺盛な、時には野放圖な生命力を見せる草木や動物、その  
 中に埋もれるように「狹室」「茅茨」が描かれ、往來に支  
 障があるほど(「妨帽」「礙眉」)狭小なすまいが提示される。  
 ここでは「狭さ」が安心感や充足感ではなく、「不快さ」  
 につながるものとして描かれている點が注目される。建物  
 の内部もまた、「落葉」や「狂花」に占據され、その中に  
 いる主人の心は「枯木」に喩えられる。周圍の自然に壓倒  
 された狭く傾いだ住まい、その中で悲嘆する主人の姿がと  
 らえられる。⑤の末尾に自身の隱逸の居を捉えて「愚公の  
 谷」というのは、庾信の他の詩文にも見られる表現。  
 ⑥以降には、「小園」での隱逸暮らしを描く。常に門を  
 閉ざし、春になれば農夫と語り合い、また隱者が尋ねてく  
 る。陶淵明風の田園における隱逸生活を描く句が續いた後、

そこに唐突に憂いが忍び込む。⑥の末尾、自由の象徴とし  
 ての鳥や魚が、心ならずも人間本位の饗應を受ける不幸を  
 いうのは、自己のおかれた状況と重ねたものであろう。序  
 文からの繰り返しとなるこの嘆きは、「小園」の背後に常  
 に通奏低音のように響いており、この賦のいわば裏のテー  
 マとなっている。

⑦加以寒暑異令、乖違德性。崔駟以不樂損年、吳質以長  
 愁養病。鎮宅神以藪石、厭山精而照鏡。屢動莊舄之吟、幾  
 行魏顆之命。／⑧薄晚閑閨、老幼相攜。蓬頭王霸之子、椎  
 髻梁鴻之妻。焦麥兩甕、寒菜一畦。風騷騷而樹急、天慘慘  
 而雲低。聚空倉而雀噪、驚懶婦而蟬嘶。(⑦加うるに以て寒  
 暑は令を異にし、徳性に乖違す。崔駟は樂しまざるを以て年を損  
 ない、吳質は長く愁うるを以て病を養う。宅神を鎮むるに石を藪  
 むるを以てし、山精を厭いて鏡に照らす。屢しば莊舄の吟を動か  
 し、幾んど魏顆の命を行う。／⑧薄晩の閑閨、老幼相い攜う。蓬  
 頭王霸の子、椎髻梁鴻の妻。焦麥は兩甕、寒菜は一畦あり。風  
 騷騷として樹急に、天慘慘として雲低る。空倉に聚まりて雀は噪

ぎ、懶婦に驚きて蟬は嘶く。）

⑦では、北と南との氣候が異なること、自らの性質（徳性）とちぐはぐであることを訴える。第二段では逃れがたい不快と共に、自身の内部の愁いにも意識が向けられる。心勞のため壽命を縮め病となった崔駰・吳質に自らをなぞらえ、小園内部にいる不氣味な存在（「宅神」「山精」）を描く。故郷への思いや二君へ仕えることの嘆き（「莊舄之吟、魏顆之命」<sup>⑬</sup>）が描かれた後、⑧からは暮らしぶりの描寫へとうつる。みすばらしい妻子、乏しい食物、陰鬱な天氣、騒がしい小動物。ここでは隱逸の住まいは、ひたすら不吉で暗く、貧しいものとして描かれている。

⑨昔草濫於吹嘘、籍文言之慶餘。門有通徳、家承賜書。

或陪玄武之觀、時參鳳皇之墟。觀受釐於宣室、賦垂楊於直廬。／⑩遂乃山崩川竭、冰碎瓦裂。大盜潛移、長離永滅。

摧直轡於三危、碎平途於九折。荊軻有寒水之悲、蘇武有秋風之別。關山則風月悽愴、隴水則肝腸斷絶。龜言此地之寒、

鶴訝今年之雪。／⑪百齡兮倏忽、光華兮已晚。不雪鴈門之踣、先念鴻陸之遠。非淮海兮可變、非金丹兮能轉。不暴骨兮龍門、終低頭兮馬坂。諒天造兮昧昧、嗟生民兮渾渾。

⑨昔吹嘘に草濫なるは、文言之慶餘を籍る。門に通徳有り、家に賜書を承く。或いは玄武の觀に陪し、時に鳳皇の墟に參す。受釐を宣室に觀、垂楊を直廬に賦す。／⑩遂に乃ち山崩れ川竭さ、冰碎け瓦裂く。大盜は潛移し、長く離れ永く滅ぶ。直轡を三危に摧かれ、平途を九折に碎かる。荊軻に寒水の悲しみ有り、蘇武に秋風の別れ有り。關山は則ち風月悽愴たり、隴水は則ち肝腸斷絶す。龜は此の地の寒きを言い、鶴は今年の雪を訝る。／⑪百齡は倏忽として、光華は已に晩る。鴈門の踣を雪がず、先ず鴻陸の遠きを念ず。淮海の變すべきに非ず、金丹の能く轉するに非ず。骨を龍門に暴さず、終に頭を馬坂に低る。諒に天造の昧昧たる、嗟あ生民の渾渾たる。）

第三段、描寫は「小園」から離れ、自らの過去の榮光、王朝が滅びた衝撃と悲嘆へと移つてゆく。過去の榮光をいう「吹嘘」「賦垂楊（長楊）」や王朝の崩壞をいう「山崩川



竭」(山川崩竭)は庾信の他の作品にも用いられる表現。⑩  
 で龜や鶴が寒さや雪を訝るといふのは、第二段⑦にある  
 「南北の氣候の違ひ」を受けたもので、寒冷なこの地にな  
 じめぬ氣持ちの表れである。賦の末尾では故郷へ歸れない  
 ことを嘆き、簡單には變わつてゆけない自身をいう。王朝  
 に殉じることなく頭を垂れて屈辱に耐える現狀を悲嘆し、  
 その嘆きは天や生民にまで擴大される。賦は全體として四  
 言句・六言句を基調とし、時折五言七言を交えて構成され  
 ており、<sup>⑪</sup>末尾の第十一節では「兮」字句を疊みかけるよう  
 に用いて悲嘆を表現している。

賦の全體を概観した。小園は苦境の中でつくられた小さ  
 な避難場所であり、逃れられない現狀への嘆きがこの小空  
 間に投影されている。また、小園はけして居心地良く豊か  
 なものではなく、貧しく荒れ果てたものとして描かれる。  
 序文で「避難場所」と捉えられていた小園は、内部の描寫  
 が進むにつれ不穩さを増し、結局は作者を苛むものとなつ  
 ているかのようだ。作品の後半、第三段では自身の經歷や

王朝の滅亡を描き、「小園」から離れたままで作品は閉じ  
 られる。やや唐突に語り始められる自己の經歷と王朝滅亡  
 の悲嘆からは、現實世界の苦しみが小園に龜裂を與え、侵  
 食し、飲み込んでいったかのような印象を受ける。北朝へ  
 移つて間もない時期の作品とされる「小園賦」だが、執筆  
 の際に庾信が置かれた特殊な狀況は、このような作品の斷  
 絶と結末について、讀者に様々な想像を抱かせるに足る。  
 序文と本文に繰り返される自由を求める鳥と魚の故事は、  
 語り得ぬものが作品の背後に残されていることを強く感じ  
 させる。

清の倪璠は序文の注で「小園賦者、傷其屈體魏・周、願  
 爲隱居而不可得也。其文旣異潘岳之閑居、亦非仲長之樂志、  
 以鄉關之思、發爲哀怨之辭者也。(小園賦は、其の體を魏・  
 周に屈するを傷み、隱居を爲すを願うも得べからざるなり。其の  
 文 旣に潘岳の閑居に異なり、亦た仲長の樂志<sup>⑫</sup>に非ず、鄉關の思  
 いを以て、發して哀怨の辭を爲る者なり。)」と評する。倪璠が  
 指摘する「北朝に身を屈する悲しみ」「隱逸が遂げられぬ  
 悲しみ」そして「望郷の思い」もまた、この作品の重要な

テーマといつて良いだろう。<sup>21</sup> 庾信の「小園」は、単純な隠逸願望を描くものではなく、これらの複雑な思いが絡み合つて構成されている。

一方で、倪璠がここで潘岳「閑居賦」や仲長統「樂志論」を挙げるのは、隠逸の「場」を描寫を連ねて構築せんとする點で、これらの作品と「小園賦」とに共通する面を見たためであろう。もちろん「小園」は、「閑居」や「志を樂しましむ」る「場」と異なる性質をもつことは、これまで見てきた中で明らかではあるけれども。

## 二 小園の隠逸

### (1) いくつかの側面から

以下では、いくつかの側面をとりあげながら、先行する隠逸文學とも比較しつつ「小園」の特徴を見ていきたい。

自由を奪われた鳥や魚（黃鶴・爰居）が、作者の投影として作品中に繰り返し表れることは既に指摘した。このうち、「鳥何事而逐酒、魚何情而聽琴（鳥何事を酒を逐わん、魚何の情ありてか琴を聽かん）」（第一段⑥）の句について、清

閑びとされた隠逸空間（二宮）

の倪璠は『莊子』至樂の以下の文章を引用する。

昔者海鳥止於魯郊。魯侯御而觴之于廟，奏九韶以爲樂，具太牢以爲膳。鳥乃眩視憂悲，不敢食一饗，不敢飲一杯，三日而死。（昔者海鳥魯の郊に止まる。魯侯御えて之を廟に觴し、九韶を奏でて以て樂と爲し、太牢を具えて以て膳と爲す。鳥乃ち眩視憂悲し、敢えて一饗を食わず、敢えて一杯を飲まず。三日にして死す。）

續けて倪璠は、

喻己宜如飛鳥棲深林、當若遊魚潛重淵。今乃失其故性、非所樂也。（己の宜しく飛鳥の深林に棲むが如かるべく、當に遊魚の重淵に潛むが若かるべきを喻う。今乃ち其の故性を失うは、樂しむ所に非ざるなり。）

と説明する。ここでいう「故性」（生まれつき備わる性質）の回復を求めること、すなわち生來備わった性質に従うこ

とこそ、六朝隱逸文學、それも隱逸の「場」を描く文學が重視してきた主張といつてよい。

陶淵明は田園に歸つて「久在樊籠裏、復得返自然（久しく樊籠の裏に在るも、復た自然に返るを得たり）」（園田の居に歸る 五首）其一」と詠い、潘岳は「閑居賦」で「拙」なる自身の本性に従つて閑居に赴いたことを強調する。謝靈運「山居賦」序文では山居にすることが「性情に順從」なることととらえられる。また沈約「郊居賦」はその冒頭で、

惟至人之非己、固物我而兼忘。自中智以下泊、咸得性以爲場。獸因窟而獲騁、鳥先巢而後翔。陳巷窮而業泰、嬰居湫而德昌。僑棲仁於東里、鳳晦跡於西堂。伊吾人之褊志、無經世之大方。思依林而羽戢、願託水而鱗藏……（惟だ至人の己に非ざるのみ、固より物我兼ねて忘る。中智自り下泊を以て、咸な性を以て以て場と爲す。獸窟に因りて騁を獲、鳥巢を先にして後翔ぶ。陳巷窮まりて業泰らかに、嬰居湫にして德昌んなり。僑仁を東里に棲ませ、鳳跡を西堂に晦す。伊れ吾人の褊志、經世の大方無し。林に依りて羽戢むを思い、水に

託して鱗藏るを願う……）

凡人を超越した「至人」の無私のみ物と我とを忘れることができる。「中智」以下の凡人は、性にそぐう場所を得てすみかとする（咸な性を以て場と爲す）、と述べ、鳥獸から始まり陳平・晏嬰・子産・高鳳の住まいを列擧する。

「小園賦」を見ると、「粗末で狭小な場所でも生きていくのは十分だ」「手厚いもてなしは望む所ではない」などの主張が読み取れるが、「自らの性情に従う」生き方については全く觸れられていない。このことは、庾信の逃避場所であった「小園」が、自己を解放できるような隠逸の場たりえなかつたことを示す。「小園」は、隱逸の住まいを言葉で連ねて構築する點では「居」を描く賦の系譜に連なるが、一方でその住まいの内實を見ると、自得の隱逸とは異質な場を描いているのだ。

一方で興味深いのは、「小園」の中にも自由に生きる生き物の姿が描寫されていることである。最も象徴的な存在である鳥と魚については、上述したように、意に沿わぬ現

状を嘆く自己の投影としてしばしば登場する。しかしその

他の描寫、例えば第一段②「蟬は翳有るも驚かず、雉は羅無ければ何ぞ懼れん」、③「藏狸窟を竝べ、乳鵲は巢を重ぬ」、④「鳥は閑暇多く、花は四時に隨う」などは、小園の中のびのびと過ごす生き物のさまを描寫する。特に③

「藏狸」は『淮南子』齊俗訓「夫飛鳥主巢、狐狸主穴。

巢者巢成而得棲焉、穴者穴成而得宿焉（夫れ飛鳥は巢を主とし、狐狸は穴を主とす。巢は巢成りて棲を得、穴は穴成りて宿を得）」を意識したもので、先ほど引用した沈約「郊居賦」にも同様の表現が見られる。動物たちの本性に従った生き方を描くのは、「隱逸の住まい」を描く常套的な表現と云つてよい。しかし「小園賦」におけるこれらの生き物は、「郊居賦」とは異なり、自身を重ねるために描かれたわけではない。「小園」の主人は、これらの動植物を傍らにして「心は則ち歴陵の枯木、髪は則ち睢陽すいようの亂絲。夏日に非ざるも畏るるべく、秋天に異なるも悲しむべし。」

④と悲嘆に暮れる。「小園」の生き物たちのありさまは、憂いや苦しみに苛まれる作者の悲哀を、かえつて浮き

彫りにするのである。

また、第二段冒頭⑦、南朝と異なる氣候風土への違和感への言及は、異土の氣候になじめぬ苦しみをいうが、隱逸文學という觀點で見ると、より重要な意味を持つ。「季節の巡りが安定していること」「時季に應じて物事が行われること」は、自適の隱逸を安定させる必須の條件といつて良い。例えば陶淵明「歸去來兮辭」に「木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善萬物之得時、感吾生之行休（木は欣欣として以て榮に向かい、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得るを善みし、吾が生行くゆく休まんとするに感ず）」というのは、安定した季節の巡りと自然の變化を享受する中で自身の生に思いを馳せるものであるし、さらに遡つて潘岳「閑居賦」が、「若乃背冬涉春、陰謝陽施（若し乃ち冬に背き春に涉り、陰 謝し陽 施す）」、「於是凜秋暑退、熙春寒往（是に於て凜秋に暑さ退き、熙春に寒さ往く）」と季節の巡りをいながら祭祀や宴遊を綴るのは、曆が正しく巡っていることを強調することで、閑居の「正しさ」をも強調するものであった。このような隱逸文學の文脈をふまえると、「小園

賦」の外界の氣候と自身がちぐはぐであるという表現は、より根本的で重要な意味を持つといえる。「正しい場所にいない」ことへの嘆きは、隱逸の住まいの表現に大きな影響を與える。「小園賦」が時に定型的な隱逸暮らしを描きながらも（第一段⑥）、どこかちぐはぐで不安定な印象がぬぐえないのは、このような氣候に對する違和感、ひいては自らがいる場所への違和感に起因するところ大であるといえるだろう。

(2)「隱逸の場」を支えるもの

——「居」賦との比較から

さて、これまでも「隱逸の場」を描く先行作品に度々言及してきた。このような「場」を描く作品の中でも、潘岳「閑居賦」・謝靈運「山居賦」・沈約「郊居賦」は「居」を描く文學として一つの系譜としてとらえることができる。

以下では、隱逸の場を定めること、「定位」をキーワードとして、これら「居」を描く賦と「小園賦」とを比較し、その性質についてさらに論じたい。

とはいえず確認せねばならないのは、「居」と「小園」の大きな違いであろう。「小園」は既に確認したように、外から隔絶された、閉ざされた小さな空間であり、一方の「居」は、動植物の羅列や各方面を網羅的に描く表現から分かるように、擴張する傾向を持った廣大な生活の場である。右に挙げた作品のうち、「閑居賦」は八十二句と短いものの、「山居賦」は七百句以上（佚文有り）、「郊居賦」は四五二句、一方の「小園賦」は一三六句と、作品の規模もその傾向を裏付けている。さらに、「居」が基本的には隱逸生活の快適さや充實を示すのと比べると、自然に壓倒されたわびしく貧しい住まいである「小園」には異質な部分も多く、單純な比較をすることは確かに難しい。

しかしその一方で、描寫を連ねて隱逸空間を構築せんとする点において両者は共通している。また倪璠が「閑居賦」と「小園賦」を並べて挙げたように、具體的な記述をもって隱逸空間を描く点において、「小園」は「居」賦の流れを確かに繼承している。さらに作品の細部に目を移すと、農作業の描寫や家族との暮らしを賦の描寫に取り入れ、

また潘岳「閑居賦」を意識した表現を用いるなど、庾信が先行作品を意識していたのは明らかだ。以下では、「居」の文學と對比することで見えてくる「小園」独自のあり方と、これらから導き出される中國文學における「隱逸」のありかたにも注目していきたい。

これらの「居」賦の先行研究として、齋藤希史「〈居〉の文學―六朝山水／隱逸文學への一視座」謝靈運の山居賦を〈居〉―すなわち隱逸の文學的トポス―の系譜の始まりにおかれる重要な作品と位置づける。本論の内容とも關わるため、まずは「閑居賦」の内容と齋藤氏の研究とを確認しておこう。

「閑居賦」序文では隱逸へ至る經緯が語られる。自身は「功を立て事を立て當年の用を效す」ことを望んだが、「拙」なるが故に不遇に甘んじてきたことが述べられ、またこれまでの官歴が細かにたどられる。そこで「止足の分を觀、浮雲の志を庶（こいねが）」い、自らの本性に従って隱逸を選んだ、という。

閑ざされた隱逸空間（二宮）

序文に續く本文ではまず、「居」のおかれた位置が語られる。「京に陪し伊に沂ひかい、郊に面し市を後ろに」し、西と東には天子の偉容を示す軍隊と學校を望む。續いて天子の祭祀の華麗さ、教學の威光がうたわれる。ここから閑居の描寫に移り、豊富な果樹や作物が列擧され、「閑居」の物質的豊かさが示される。續いて一族の行樂と團樂の様子が描かれる。最後に再び自身が「用薄く才劣る」事を確認し、「終に優遊して以て拙を養わん」と決意が語られ、賦は終わる。

齋藤氏は「〈居〉の文學」の中で、「閑居賦」の隱逸は「各おのがその本性に隨」（82頁）うことで遂げられるものである、と指摘する。また、いわゆる「賢人失志」の隱逸と異なり、太平の世における「拙」なる者の自得の隱逸、快適さや豊かさとも具體性を獲得した隱逸空間を描き出した點で、「閑居賦」は晝期的な意味を持つとする。「拙さきもの自得の場としての〈居〉」は、續く陶淵明・謝靈運の時代にも受け繼がれていく（84頁）。このような自得の隱居は「春」という季節を媒介にして確立されてきた。『楚

「辭」系の文學が「悲秋」を描くのに對し、春という季節は「より古代的もしくは農村的なイメージを有し、言わば、都市において當代の政治に携わる士大夫にとつて、そのノスタルジーの對象たる樂園表象として十分な資格を備えている」(87頁)。陶淵明「歸去來の辭」が「農」と「春」をつないで提示するのもその故であるという指摘は、隱逸文學の源流を考えるにあたって、重要な指摘であろう。「小園賦」で斷片的に描かれる隱逸生活も、やはり春を舞臺としていた(第一段⑥)。

「閑居賦」のあとに「居」を描く文學として作られたのが、謝靈運「山居賦」<sup>27)</sup>である。謝靈運は永初三年(四二二)に建康を出て永嘉太守として赴任し、その後景平元年(四三三)、故郷の會稽始寧縣に隱居した。「山居賦」はそれ以降の作品とされる。七百數十句からなる、「京都賦」へのオマージュ<sup>28)</sup>と指摘される堂々たる大作である。

「山居賦」序文では賦を作った動機が示される。「閑居賦」とは異なり、自らの官歴には一切觸れず、古來の隱逸の型を提示した上で、「抱疾就閑、順從性情。敢率所樂、

而以作賦(病を抱いて閑に就き、性情に順從し、敢えて楽しむ所に率<sup>したが</sup>い、而して以て賦を作る)」と創作の動機が簡単に述べられる。またその賦作に關しては、「今所賦既非京都宮觀遊獵聲色之盛、而敘山野草木水石穀稼之事(今賦する所は既に京都宮觀遊獵聲色の盛んなるに非ずして、山野草木水石穀稼の事を敘ぶ)」という。謝靈運自身は違いを強調するが、賦の表現方法が京都の賦にならっているのは、作品を一瞥すれば明らかである。

齋藤氏の「謝靈運の山居」では序文でのこれらの記述に注目し、「閑居賦」から「山居賦」への明確な轉換を指摘する。それによると、「閑居賦」は空間を詠う文學として京都賦との類似性もち、「山居賦」もこれを踏まえている。しかし、「閑居賦」がその半ば近くを費やして京都の盛んなさまを描き天子の徳を稱えたのに對し、「山居賦」は終始自らの〈居〉のみを描寫する。言い換えれば、……その〔筆者補…「閑居賦」の〕〈居〉がそれ自身の價值は持ちつつも、やはり〈世〉のうちに位置づけられているのに對し、「山居賦」はすでに〈世〉なくして〈居〉を成立さ

せているのである」(37頁)。すなわち、「閑居賦」から「山居賦」へ至る過程は、「居」が〈世〉＝天子を中心とする秩序だった世界から獨立し、それ自身のみによる價値を獲得していった過程とみなすことができる。齋藤氏はこれを、「國家的秩序」をうたう文學(筆者注…京都賦を指す)に對する「私的秩序」をうたう文學の宣言」(「居」の文學」86―87頁)と指摘する。

これらの指摘は、「居」がいかにして隱逸の場としての獨立性を獲得していったか、すなわち六朝の士大夫がいかん文學の世界で「私」の世界を確立していったかを考える際に、重要な意味をもつ。この指摘を受けてさらに付言すると、「閑居賦」では自身の官歴を縷々述べて「拙」なる自己の證明とし、それによって隱逸への経緯を示していたのに對し、「山居賦」では自己の経歴に全く觸れない。「山居」においては、官界での経緯を語らずとも「隱逸」の世界に入っていけるのであり、これも「居」の獨立性の一つの表れと見なすことができるだろう。さらに續く時代の沈約「郊居賦」を見ると、「居」に對置される「天子が治め

る世の安定や秩序(世)」には全く言及しておらず、こゝでも「山居賦」と同様に「居」が〈世〉の支え無しで獨立して存在し得ていることが分かる。

しかし一方で、このような隱逸の「居」が、何の支えも無く存在し得るのかというと、そうではない。以下、潘岳「閑居賦」には描かれず、「山居賦」「郊居賦」に見られる新たな要素からそれを探ってみよう。

「山居賦」冒頭の自注では、このように述べられる。

余祖車騎建大功准・肥、江左得免橫流之禍。後及太傅既薨、遠圖既輟。於是便求解駕東歸、以避君側之亂。廢興隱顯、當是賢達之心。故選神麗之所、以申高棲之意。經始山川、實基於此。(余が祖車騎 大功を准・肥に建て、江左 橫流の禍を免るるを得たり。後に太傅 既に薨するに及び、遠圖既に輟む。是に於て便ち駕を解きて東に歸るを求め、以て君側の亂を避く。廢興隱顯は、當に是れ賢達の心なるべし。故に神麗の所を選び、以て高棲の意を申ぶ。山川を經始するは、實に此に基います。)



祖父である車騎將軍謝玄の功績とその後の隱逸について述べ、「居」を構える場所のそもその由來を記す。「謝靈運の山居」が指摘するように、「山居」は「山川を經始する」、すなわち「人の手の入っていないなかった山川に手を加えて新たな世界を作る」(40頁)ものと捉えられていた。作品は續いて、自らの隱居について言及する。

仰前哲之遺訓、俯性情之所便。奉微軀以宴息、保自事以乘閑。愧班生之夙悟、慚尚子之晚研……(前哲の遺訓を仰ぎ、性情の便とする所を俯す。微軀を奉じて以て宴息し、自ら事うるを保ちて以て閑に乗す。班生の夙に悟るに愧じ、尚子の晚く研むるに慚す……)

自注には、「謂經始此山、遺訓於後也。性情各有所便。山居是其宜也(此の山を經始するは、訓えを後に遺すを謂うなり。性情 各おの便なる所有り。山居は是れ其の宜しきなり)」と説明する。安藤信廣氏が指摘するように、謝靈運の「山居」は祖父の退隱を繼承するものと捉えられていた。また、

過去の地は祖父の遺徳に守られた特別な場所として描かれる。作品中にこのような「地縁」を描くことは、自身の「居」の由來や由緒を確認し、「居」に特別な存在意義を與える。「居」が構築されるその場所は、自身の血統・祖先の遺徳によつて保證されているのである。このような祖先傳來の地に對する言及は、山居の正統性を支える重要な要素と考えることができる。「山居賦」については、京都賦と同じ手法で廣大な山居の様子を賦陳すること、また大量の自注によつて「山居」を描くことに注目が集まりがちだが、このような地縁・血縁への言及もまた、「山居」を構成するための重要な要素であると言えるだろう。

沈約の「郊居賦」では歴史の敘述がさらに存在感を増す<sup>34</sup>。作品前半では沈氏の歴史や自身の官歴、南朝の歴史の敘述に多くの句が費やされる。前漢に沈氏の一族が居を移したことから語り始め、十六世の祖沈戎が九江・壽春から會稽郡烏程縣(後の吳興郡)に居を移したこと、祖父沈林子が反逆者の子として逆境におかれる中、劉裕のもとで力を發揮し、屋敷を賜ったこと(遷華扉而來啓、張高衡而徙植。傍

逸陌之脩平、面淮流之清直」を述べた後、時を経て荒れ果ててしまった先祖ゆかりの住まいに、今一度手を入れて妻子と共に移り住もう、と詠われる。續いて隱逸への思いが詠われ（迹平生之耿介、實有心於獨往。思幽人而軫念、望東臯而長想）、仕官と隱逸の狭間でゆれる氣持ちが表白される。この

後も歴史の敘述はなお續き、齊末東昏公の混亂期から梁武帝の即位、その後の自己の官歴を述べる。寵愛や高祿が保持しがいことを述べた上で、高位高官の者たちが手に入れた豪華な住まいとは一線を畫し、孫叔敖や蕭何のように荒れ地に身をおこう、と隱逸への思いを述べる。このような構成について、先行研究では後漢より梁代に至る沈氏の歴史を敘述する箇所を二段（百二十句）に分け、ともに「段の末二句で『歸去來辭』の世界を暗示しつつ、隱棲の強い願いを詠じている」と指摘する。<sup>31)</sup>

このような重厚な前置きを経て、ようやく郊居の描寫が始まる。南朝の歴史・一族の經歷と隱逸への願望を述べた前半部分は全て六言句で描寫され、郊居の具體的描寫に移ると六言句を中心に三言九言を交え變化に富んだ句法で描

寫されることが指摘されており、「郊居に至るまで」と郊居そのものの描寫は、表現や構成上、意圖的に區切られていることがわかる。「郊居」はいわば、南朝と沈氏一族の歴史の敘述を積み重ねた上に築かれているのである。

「郊居」の描寫にたどりついてからも、作者の歴史語りは續く。「郊居」の周圍を眺める目は、謝安の豪勢な宴遊や三國吳の孫氏の墓、また齊の文惠太子との思い出を描き、權勢を誇ったものがあつというまに霧消したことを嘆く。續いて仙界へのあこがれ、鍾山の描寫と續き、敘述は東晉の六人の皇帝の事跡へと移る。終盤になると再び自身の經歷が語られ、老いてなお仕官から逃れられない我が身だが、郊居に身も心も休めたい、と結ばれる。このように、「郊居賦」は歴史への言及が大きな割合を占める。このような歴史敘述の廣がり、謝靈運の「山居賦」が空間の廣がり志向したのとはまた異なった形の「居」のあり方を示している。<sup>32)</sup> 沈約晩年に書かれたとされる「郊居賦」は、人生の總括としての意味ももっていたと考えられる。

「閑居賦」に記される自らの官歴や（世）と對置される

閑居の位置づけ、「山居賦」に表される祖先の遺徳を繼承する態度、また「郊居賦」の一族や王朝の歴史への言及は、隱逸の「場」を定めるには一定の物語が必要であることを示している。「仕官から隱逸へ」は、單純な生活の場の移動ではありえない。生き方の一大轉換に際して、隱逸に至るまでの経緯や隱逸の場は入念に意味づけられ、語られる必要があるのだ。このようにして見ると、地縁・血縁のゆかりが無い場所に「居」を築こうとした潘岳の「閑居」は、むしろ特殊な例にとらえることもできるだろう。

さて、「小園賦」に目を移してみると、これら三作品の影響を受けながらもその獨自のあり方が明らかとなる。まず賦に付された短い序文では、「小園」での隱逸に先立つものとして狭小な空間に身を置いた例が列擧され、「小さな住まい」に對比するものとして豪華な邸宅の故事を擧げる。過去の隱逸の例を連ね、自らと對比あるいは同化するの、隱逸文學の常套表現といえる。そして「小園」もまた「山居」や「郊居」と同様に、潘岳が意識した〈世〉をまったく意識せずに——というより、「小園」の外側はま

るで意識せずに——存在している。<sup>34)</sup>

一方で、「小園賦」には「居」賦がそれほど重視した「隱逸の場をいかに定めたか」「なぜ自身がこの場所に至ったか」が全く描かれない。序文では「余 數畝の弊廬有り、人外に寂寞たり。聊か以て伏臘に擬し、聊か以て風霜を避く」と「小園」の場所が示唆されるのみであり、その後直接内部の描寫にうつる。これまで見てきた「居」賦がそれぞれの「居」を入念に意味づけしてきたのと對比すると、非常に簡素な構成といえる。「居」が〈世〉との對置・先祖とのつながり・土地の詳細な描寫・歴史……を描くことによってその存在を刻みつけるのに對し、「小園」にはその存在を外から支える要素が脱落している。そして、そのことが、「小園」の孤立を一層際立たせている。

それでは「小園賦」に「居」賦で見えてきたような「由來」の敘述が全く存在しないかといえ、そうではない。しかしそれは、その他の賦とは異なつて作品の末尾（第三段）におかれている。末尾で詠われる南朝梁での自身の過去の榮光と、王朝が滅びた衝撃、その渦中であつての悲嘆

——既に指摘したように、これらは「小園」というテーマと作品の流れからすると、やや唐突なものに感じられる——は、自らがこの「小園」に到った「由來」を間接的にせよ説明するものだ。

これらの記述について、「小園賦」には北朝に身を屈することの悲しみや望郷の念が込められており、だからこそ最後にこれらに言及するのだ、という理解も可能であろう。しかしそれだけではなく、「居」賦の流れを概観すると、庾信がここにこめた意圖や構成に更に深い理解が得られるように思う。

潘岳が自己の経歴を述べ、沈約が祖先の系譜や自身の経歴を縷々語ったように、隱逸を描く際、その前段階として個人の歴史を語ることは、當時にあつては重要な要素であつた。また、個人に限らず大きな歴史の流れを描き、その中に自己の隱逸を位置づける態度は、沈約「郊居賦」に既に表れていた。官から隱へという生き方の轉換を示す「居」賦においては、いわば「もう一つのアイデンティティ」を獲得するために、表現を盡くす必要があつたのだ。

庾信が過去の榮光や王朝の滅亡を描く背景には、これら先行する賦の影響を受け、自らの物語を語ろうとする意識があつたのではないか。しかし結局それらは、自身がいまこの「小園」で隱逸を試みることの直接の理由としては提示されない。そして賦は、南朝の滅亡や自己の境遇への嘆きへとうつり、その嘆きを天や生民にまで廣げて結ばれる。

なぜ隱逸に到る「背景」が脱落しているのか、あるいはなぜ庾信は自らの「歴史」を末尾に記し、「小園」と結びつけなかつたのか。北遷という「斷絶」を前に語るべき言葉をもたなかつた、語ることが憚られたなど、様々な理由が考えられるが、いずれも推測に過ぎない。しかしこのような脱落にこそ、庾信が設けた「小園」の孤立と孤獨とが表れているのではないか。「小園賦」は「隱逸」へ至る歴史や土地の由來を語ろうとせず、それでも作品末尾に自らの來し方を描いた。そこには、地縁も血縁も斷絶され、據つて立つべき「世」からも切り離されてしまった「異邦人」が、隱逸の住まいを築く難しさと孤獨とがにじんでいくように思われる。

おわりに

本論では隱逸における「閉ざされた小空間」がどのように描かれるかという興味のもと、「小園賦」の分析を進めてきた。これまで見てきたことから明らかのように、庾信の「小園」は後代の白居易が描く閉ざされた空間とは全く性質を異にする。庾信と白居易の置かれた状況は大きく異なり、そもそも比較の対象にすること自体、無理があるとの見方もある。しかし始めに述べたように、周囲の状況と自身のあり方がちがはぐになった時、「小空間に避難する」というあり方は、隱逸の普遍的な態度と言って良い。「外界の遮断」という観点からみると、白居易は自身の人生において獲得したもので住まいを充足させ、意識的に外の世界との断絶を作った。<sup>85</sup> 庾信は自身がこれまでの文學きたものから分断された場所で、それでもこれまでの文學を意識しながら避難場所を築こうとした。

庾信の「小園」の存在は唐代でも意識されていたようで、白居易にはこのような作品が残る。

小宅 小宅

小宅里閭接 小宅 里閭に接し

疏籬雞犬通 疏籬 雞犬通る

渠分南巷水 渠は南巷の水を分ち

窗借北家風 窗は北家の風を借る

庾信園殊小 庾信 園は殊に小さく

陶潛屋不豐 陶潛 屋は豊かならず

何勞問寬窄 何の勞ありてか寬窄を問わん

寬窄在心中 寬窄は心中に在り

大和九年（八三五）、白居易が洛陽履道里で作った作品とされる。ここでは庾信の「小園」から「小さい」という要素のみを抽出し、その苦惱や孤獨は全く看過されている。いかにも白居易らしい表現ともとれるが、地縁・血縁など外部の様々な要素によって隱逸の場を支えようとした六朝の士大夫と、そこから脱却し「心中」のありかたによって自身の世界を獲得していった中唐の士大夫との違いをはつきりと示しているようで、興味深い。

註

- ① 中唐前期の詩人韋應物の「郡齋詩」や中唐における「吏隱」の廣がりについては、赤井益久『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）「第Ⅴ部 周邊からの照射」第一章と第二章、参照。
- ② 拙論「池上篇并序論」——あわせて自適の空間を定義する幾つかの表現について——（『中國文學報』第七十三冊、二〇〇七年四月）、同「園林の「小空間」——白居易詩文を中心として」（『日本中國學會報』第六十五集、二〇一三年）。
- ③ 拙論「園林の「小空間」——白居易詩文を中心として」（前掲注②）、99頁。
- ④ 王毅『園林與中國文化』（上海人民出版社、一九九〇年）は、園林空間の重要なキーワードとして「壺中天」に注目し、その變遷を論じる。同書が指摘するように、庾信の「小園賦」中には、中唐以降の「壺中天」式小空間がもつ「小空間の中に廣大な廣がりを観る」性質は、まだ見出すことができない（第一篇第六章第一節「壺中天地」——中國古典園林在中唐以後的基本空間原則）。
- 因みに、「小空間」を主題とする賦として、『藝文類聚』卷六十四・室に西晉の潘岳・庾闡の「狹室賦」の斷片が収められ、また南朝陳・蔡凝には「小室賦」なる作品があった（今佚）。潘岳「狹室賦」の作品は外界の暑さ・猛雨に翻弄される貧しい空間を描き、庾闡「狹室賦」は清貧を是とする前提
- に疑義を唱え、猛暑にも涼を保つ居室の様子を描く。このような作品が残されていることは興味深いが、これらの作品に庾信「小園賦」に連なる要素は少ないと考えられる。
- ⑤ 制作年代について、先行研究では江陵の陥落後西魏に拘留されて間もない時期とする点でほぼ一致するが、細かい年代はやや分かれる。魯同群『庾信傳論』（天津人民出版社、一九九七年）では五五五年あるいは五五六年、梁が滅びる前とする。興膳宏『望郷詩人 庾信』（中國の詩人④、集英社、一九八三年）では、五五六年、西魏に出仕した頃の作と推定する。加藤國安『越境する庾信 その軌跡と詩的表象』（研文出版、二〇〇四年）は「内容的に見て隱棲を理想としながらもそれを貫徹せず、「小園」の夢が破綻してゆくのは、出仕前後の葛藤を示したものと考えられる」（258頁）として興膳氏の説に賛同する。本論も、興膳・加藤兩氏と見方を同じくする。本論で後に詳しく見ていくように、「小園賦」には出仕への葛藤が背後に読み取れ、またそのような葛藤が、「小園」という隱逸空間の描寫にも反映されていると考えられる。後に觸れる倪璠の注に「願爲隱居而不可得也（隱居を爲すを願うも得べからざるなり）」というの、同様の捉え方をしていると考えられる。
- ⑥ 安藤信廣『庾信と六朝文學』（創文社、二〇〇八年）第2部 第3章「後期の賦の特徴」第一節「竹杖賦」における再生への希求」参照。

⑦ 興膳宏『望郷詩人 庾信』（前掲注⑤）二三 關外思歸の客」、106頁。

⑧ 一例を挙げると、張衡「東京賦」（『文選』卷三）「聘丘園之耿契、旅束帛之芟芟（丘園の耿契を聘し、束帛の芟芟たるを旅ぬ）。薛綜の注に「耿、清也。旅、陳也。謂有清契者也。言丘園中有隱士貞契清白之人、聘而用之。束帛、謂古招士必以束帛加璧於上。周易曰、六五、賁于丘園、束帛芟芟」。王肅の注に「失位無應、隱處丘園。蓋蒙闇之人道德彌明、必有束帛之聘也。芟芟、委積之貌也」。

⑨ 『莊子』逍遙遊「鶴鶴巢於深林、不過一枝（鶴鶴深林に巢くうも、一枝に過ぎず）」に出る。

⑩ 『漢書』敘傳「漁釣於一壑、則萬物不好其志。栖遲於一丘、則天下不易其樂（一壑に漁釣すれば、則ち萬物其の志を好さず。一丘に栖遲すれば、則ち天下其の樂しみを易えず）」に出る。

⑪ 梁の武帝にも仕え重用された徐勉は、榮達したものの蓄財に拘らず、俸祿は親族の窮乏した者に分け與える清廉な人物だったという。徐勉の「小園」については、大室幹雄「園林都市 中世中國の世界像」第十二章 郊居 園田居 山居——文化と自然の背景畫法」（三省堂、一九八五年）に言及がある。以下に徐勉の手紙の一部を載せておく。

中年聊於東田間營小園者、非在播藝、以要利入。正欲穿池種樹、少寄情賞。又以郊際閑曠、終可爲宅、儻獲懸車致事、

實欲歌哭於斯。……但不能不爲培塿之山、聚石移果、雜以花卉、以娛休沐、用託性靈。隨便架立、不在廣大、惟功德處、小以爲好。所以內中逼促、無復房宇。……由吾經始歷年、粗已成立、桃李茂密、桐竹成陰、陞陌交通、渠畎相屬。華樓迴樹、頗有臨眺之美。孤峯叢薄、不無糾紛之興。瀆中竝饒菰蔣、湖裏殊富芰蓮。雖云人外、城闕密邇……憶謝靈運山家詩云、中爲天地物、今成鄙夫有。吾此園有之二十載矣、今爲天地物、物之與我、相校幾何哉。

⑫ 以下庾信作品の底本は『庾子山集』十六卷（明屠隆評點、四部叢刊所収）を底本とし、『庾子山集注』（清倪璠注、許逸民校點、中國古典文學叢書、中華書局、一九八〇年）を参照して一部文字を改めた。また、「小園賦」の解釋については加藤國安氏（前掲注⑤、第Ⅱ部第二章）が訓讀と全譯を提示しており、参照させて頂いた。拙稿「庾信「小園賦」初探」（『滋賀大國文』第五十二號、二〇一四年八月）には注釋も含めた全文の解釋を掲げた。

⑬ 戰國・齊の宰相晏嬰の主である齊の景公は、市場に近いことなどを挙げて晏嬰の住環境の悪さを指摘し、住まいを變えるよう勧めた。晏嬰はこれを辭して、「且小人近市朝夕得所求、小人之利也。（且つ小人市に近く朝夕求める所を得るは、小人の利なり）」と述べた（『左傳』昭公三年）。また西晉の潘岳「閑居賦」（『文選』卷十六）に「陪京泝伊、面郊後市。（京に陪し伊に溯かい、郊に面し市を後ろにす）。庾信が

「城」に面す、とするのは、事實に即したのか、或いは記憶違いであろうか。

⑭ 注①に引く徐勉の手紙を参照。

⑮ 『晉書』卷九四・隱逸傳・張忠に「其の居は崇巖幽谷に依り、地を鑿ちて窟室を爲る」。また『淮南子』齊俗訓と揚雄『解嘲』に、顔闔（魯國の隱士）が魯君の招聘を受け、「培（建物後ろの壁）を鑿ちて通ぐ」と見える。「培」は「坯」に同じ。

⑯ 「愚公」の故事は「説苑」説理に見える。齊の桓公が狩りをしていて、山谷で一人の老人に出會った。老人は谷の名を「愚公の谷」、自らは「愚公」であると名乗った。老人曰く、自ら育てた牛を賣り、馬を買って歸った所、ある若者から「牛が馬を産むはずはない」として馬を奪われてしまった。傍らで見えていた人が、老人を愚かであるとそしめた、という。愚公の故事を用いるのは、庾信「擬詠懷二十七首」其十六。この連作は北遷後に作られ、庾信の内面を窺うための重要な作品とされる。また、其十六は倪璠の注に「小園賦」との類似が指摘されている。原文を以下に挙げる。

横石三五片、長松一兩株。對君俗人眼、眞興理當無。野老披荷葉、家童掃栗跗。竹林千戶封、甘橘萬頭奴。君見愚公谷、眞言此谷愚（横石三五片、長松一兩株。君が俗人の眼に對せば、眞興 理當に無かるべし。野老 荷葉を披り、家童 栗跗を掃く。竹林 千戶封、甘橘 萬頭奴。君愚公の谷を見れ

閑ざされた隱逸空間（二宮）

ば、眞に言わん此の谷愚かなりと）。

⑰ 莊舄は戰國時代の人。「史記」卷七十・陳軫傳に「越人莊舄仕楚執珪、有頃而病。楚王曰、舄故越之鄙細人也、今仕楚執珪、貴富矣。亦思越不。中謝對曰、凡人之思故、在其病也。彼思越則越聲、不思越則楚聲。使人往聽之、猶尚越聲也。」（越人莊舄楚に仕えて珪を執る、頃有りて病む。楚王曰く、舄故は越の鄙細の人なり、今楚に仕えて珪を執り、貴富となる。亦た越を思うや不や、と。中謝對えて曰く、凡そ人の故を思うは、其の病むに在るなり。彼越を思えば則ち越聲ならん、越を思わざれば則ち楚聲ならん、と。人をして往きて之を聽かしむれば、猶尚お越聲なり）。祖國を思いながら異國で仕える自身になぞらえる。

魏顆は春秋時代の人。父親が死んだ際に、その愛妾を他へ嫁がせた。ここでは魏顆の故事を、二君に仕えた自身になぞらえるととった。『左傳』宣公五年に「魏顆……初、魏武子有嬖妾、無子。武子疾、命顆曰、必嫁是。疾病則曰、必以爲殉。及卒、顆嫁之。曰、疾病則亂。吾從其治也。」（魏顆……初め、魏武子に嬖妾（愛妾）有りて、子無し。武子疾し、顆に命じて曰く、必ず是に嫁せしめよ、と。疾病なれば（病が重くなると）則ち曰く、必ず以て殉を爲さしめよ、と。卒するに及びて、顆之を嫁せしむ。曰く、疾病なれば則ち亂る。吾其の治なるに従うなり、と）。この句について、「魏武子が病で正氣を失い譚の分からぬことを命じたように、自身もおかし



くなりそうだ」という解釋もあるが、とらない。

⑱ 「龜言……」は、「秦書」(水經注)渭水)に引く以下の話をふまえる。井戸の中から掘り出され「客龜(旅人の龜)」と名付けられたた龜が死んだ後、夢に出てきて「言我將歸江南、不遇、死於秦。魯於夢中自解曰、龜三萬六千歲而終、終必亡國之徵也(言えらく、我將に江南に歸らんとするも、遇わず、秦に死す、と。魯夢の中に自ら解きて曰く、龜三萬六千歲にして終わる、終わるは必ず亡國の徵なり)。江南の地に歸れずにいる内に梁王朝が亡びた經緯を重ねる。

「鶴訝……」は劉敬叔『異苑』に「晉太康二年冬大寒、南洲人、見二白鶴語於橋下。曰、今茲寒不減堯崩年也。於是飛去(晉太康二年冬大寒、南洲の人、二白鶴の橋の下に語るを見る。曰く、今茲の寒さ堯の崩する年に減ぜざるなり、と。是に於て飛びて去る)。聖天子堯の崩御と、南朝梁の元帝の崩御とを重ねる。

⑲ 第一章冒頭で觸れたように、北遷後の庾信の賦には七言句がほとんど用いられないことが、先行研究(興膳宏『望郷詩人 庾信』(前掲注⑤))で指摘されている。「小園賦」にも七言句はいくつか登場するが、それは「2・2・3↓4・3」の軽快なリズムとは異なり、「2・5」あるいは「2・1・4」のリズムで描かれている。一例を挙げると、第三段⑩「荆軻有寒水之悲、蘇武有秋風之別。關山則風月悽愴、龍水則肝腸斷絶」。

⑳ 仲長統のいわゆる「樂志論」は、『後漢書』卷四十九本傳に見える。この「樂志論」を「閑居」を描く文學の系譜において分析した論文に、齋藤希史「(居)の文學―六朝山水／隱逸文學への一視座」(『中國文學報』第四十二冊、一九九〇年)がある。

㉑ 庾信が「隱逸を遂げることができず」「北朝に節を屈した」ことについて、興膳宏氏に以下のような指摘がある。「庾信とて、その詩でしばしば吐露しているように、自己の生き方に疑問を感じ、できうることならかつての周弘讓のごとく、山中に隠れてひっそりと生きたいと、本気で願っていただろう。だが、彼がもしほんとうにみずからの意志で官途を離れる決意をしていたら、それは可能になったであろうか」。氏はこのように述べ、北朝が南朝に比べて隱逸に非許容的であったこと、南朝の正史には隱逸者の傳が多く立てられる一方で、北朝の正史には隱逸者がほとんど取り上げられないことを指摘し、「當時の社會全體への展望をぬきにしては、個人の進退を輕率に非難できぬことを知らねばならない」とする(『望郷詩人 庾信』「三 關外思歸の客」、121―122頁)。北朝において隱逸を抑壓する風潮があったことは、池田恭哉『南北朝時代の士大夫と社會』(研文出版、二〇一八年)第五章「北朝における隱逸―王朝の要求と士大夫の自發―」に詳しい。

㉒ 齋藤希史「(居)の文學―六朝山水／隱逸文學への一視

座」(前掲注<sup>20</sup>)では、潘岳の「閑居」が「共にそれぞれの分に應じて務めを果たし「自得の場」を得ている」点において天子のいる都と對置されていること、また沈約の「郊居」も萬物が自得の場を得ているという意味で潘岳の「閑居」と同質であることを指摘する。

- ②3 齋藤希史「謝靈運の山居―〈居〉の文學(二)」(『中國文學報』第六十一冊、二〇〇〇年) 35-37頁には、謝靈運が山居を「性情にかなう」場と捉えていたことについて、「遊名山志」も引用しつつ詳細な説明を加える。

- ②4 以下本文の引用は、『梁書』卷十三沈約傳(中華書局、一九七三年)による。

- ②5 獸と鳥については、『淮南子』齊俗訓「夫飛鳥主巢、狐狸主穴。巢者巢成而得棲焉、穴者穴成而得宿焉(夫れ飛鳥は巢を主とし、狐狸は穴を主とす。巢は巢成りて棲むを得、穴は穴成りて宿るを得)」をふまえる。

以下それぞれ功成り名遂げた人物のすまいにまつわる故事を挙げる。陳平は、漢の高祖劉邦に仕えた知謀。『史記』陳丞相世家に「家乃負郭窮巷、以弊席爲門、然門外多有長者車轍(家は乃ち郭を負い巷に窮し、弊席を以て門と爲し、然るに門外多く長者の車轍有り)」。嬰は晏嬰、戰國・齊の靈公・莊公・景公に仕えた名宰相。『左傳』昭公三年に「景公欲更晏子之宅曰、子之宅近市、湫隘囂塵、不可以居、請更諸爽塏者(景公晏子の宅を更えんと欲して曰く、子の宅市に近く、

閑ざされた隱逸空間(二宮)

湫隘囂塵たり、以て居るべからず、請う諸を爽塏なる者に更えん)。橋は子産、春秋・鄭の政治家。『論語』憲問に「東里子産潤色之(東里の子産之を潤色す)。風は高鳳、後漢の隱者。『後漢書』逸民傳に「其後遂爲名儒、乃教授業於西唐山中(其の後遂に名儒と爲りて、乃ち業を西唐山中に教授す)」。

- ②6 「居」の文學については、前掲注<sup>20</sup>参照。また、「謝靈運の山居」は前掲注<sup>23</sup>参照。

- ②7 「山居賦」の引用は、『宋書』(中華書局、一九七四年)謝靈運傳によった。

- ②8 塚本晉也「謝靈運の「山居賦」と山水詩」(『集刊東洋學』六五、一九九一年五月)、23頁。

- ②9 安藤信廣「庾信と六朝文學」(創文社、二〇〇八年)第一部 第二章 第二節「謝靈運の「山居賦」の構造と佛敎」、156頁。

- ③0 「郊居賦」の解釋については、中森健二「沈約「郊居賦」について」(『學林』三、一九八四年)・今場正美「沈約「郊居賦」譯註」(『學林』二七、一九九七年)を参照させて頂いた。

- ③1 中森健二「沈約「郊居賦」について」(前掲注<sup>30</sup>)、34頁。

- ③2 前掲注<sup>30</sup>中森氏の論文、34頁。
- ③3 齋藤希史「關於「居賦」―閑居賦・山居賦・郊居賦」(『第四屆國際辭賦學術研討會論文集』、江蘇教育出版社、一九

九九年十二月）は、「山居賦」は空間によって自己を語り、「郊居賦」は歴史によって自己を語る、と指摘する。また居賦を「單に隱居を主題とした作品ではなく、自分を表現することを意圖した『自畫像』の文學」と定義する。

③4 庾信の小園が外部から遮斷された性質を持つことについては、園林研究の分野からも指摘がある。外村中「北周の庾信と南朝建康の東宮の園林および「小園賦」について」（『ランドスケープ研究・日本造園學會誌』65（4）、二〇〇二年三月）では、「それまでの居住空間と比較して、彼の「小園」の一番の特徴は何かといえは、「小園賦」の内容から理解されるとおり、ほとんど周園（外部）との關係を斷つた、いわば周園とは異なる次元に存在する居住空間であるという點である」（339頁）との指摘がある。

③5 本論後半で注目した「隱逸の場をいかに定めたかを語る」という觀點からいうと、白居易「池上篇」では序文冒頭の「都城風土水木之勝在東南偏、東南之勝在履道里、里之勝在西北隅、西開北垣第一第、即白氏叟樂天退老之地（洛陽城の風土・水木の勝景は東南の偏にある。東南の勝景は履道里にある。里の勝景は西北の隅にある。西の門から北垣に沿って一番目の屋敷が、白氏の叟樂天の隱居の地である）」——自身が屋敷を構えた場所が、いかに素晴らしい場所かを焦點を次第に絞りながら述べる——がそれに當たるであろう。このような「入れ子構造」を用い空間を絞り込む表現は、白居易

が廬山草堂を築く際にも用いたものであった。これらの表現からも、六朝の隱逸空間の價値付けと大きく異なる態度がうかがえる。

「付記」本研究はJSPS科研費JPI5K16721の助成を受けたものである。